

資料

——アチック・ミュージアムの刊行物から——

沖永良部島の印象

岩倉市郎

こちらは如何に暑いと云つても毎日南風が吹いて七月十一日の九〇度を最高に八七・八度を越しませんので誠に凌ぎ良く存じます。

さて其後の概況を簡単にご報告いたします。

沖永良部島の採集は意外に永くなり壹ヶ月に亘りました。昔話の方は予定以上の収穫がありました。量的には僅々一七〇話にすぎませんでしたが質的には可なり優れたものを聴くことが出来ました。私は今まで空想してゐた所謂第一期昔話に接した感が致しました。話の種は内地の場合と大差ありませんが伝承形式が非常に古風で文学的でありました。尤も之は此島が特に古型を現存してゐたまでのことで内地にも嘗つては然うした形で伝承されてゐたのかも知れませんが兎に角今の世で優れた話者に遭遇することは珍しく難有いことに思はれました。

民俗採集の方は渡島当初に写真撮影を封じられましたので全く意気消沈してしまひました。しかし大島憲兵隊には諒解を得たことでもありますし私にも期する所がありましたし断然二ダース撮りました。家屋の形式は南島一圓に亘つて総合比較の必要を痛感いたしました。これは今後の興味ある課題となるでせう。

喜界島の一丈三尺柱屋は多分に鹿児島の影響を受けて居ります。永良部では此形式の家を「タヌキ屋」(タル木屋)と称して居りますが極めて稀にしか見受けませんでした。たゞし間取りは全く変つて居ります。概して沖永良部島は屋敷が狭く家も小さくあります。家の形式からしますと南方特有の形式は南に下るほど濃厚のやうな気が致しました。頭上運搬なども、其一例かと思ひます。彼島で女が物を背中に負ふのを見たことはありません。

漁業に就ては詳しく調べる機がありませんでしたが例へば喜界島の如き海の忌詞など全く聞かれず漁業の種類も少く規模も小さい様に思はれました。

それから永良部にはユタが非常に多く居ります。一般の信仰も強いらしく盛に利用されて居ります。私の疑問にしてゐた点なども大分教へられる所がありました。

彼島で特に気を引かれたのは農業に精励なこと道路の良いこと松の多いこと、美しい鳥やホタルの居ること石垣の積み方の巧なこと等でありました。(八月六日着)

(「アチックマンズリー」第十四号一九三六年 八月三十日刊 所収)

※文中一行目の「九〇度」とはカ氏の表示であろう。セ氏で32.2度に相当する。